

万松院と宗家墓所

万松院は、13 世紀から 19 世紀後半まで対馬の領主であった宗家の菩提寺である。厳原の町の西端、清水山の陰にあるこの寺は、1615 年以降の宗家の墓がある広大な霊廟を含む。宗義成（1604-1657）が父・義智（1568-1615）を偲び、義智の法号をとって万松院と名付け、17 世紀前半に創建した。寺に隣接した金石城は、宗家の本拠地であり、主な居城であった。

万松院は、赤い山門の横を通って入ることになっている。門内には魔除けや寺の守護神として信仰されている仁王像が 2 体立っている。他の建物は火災で消失し、その後、再建されたもので、山門は境内に残る唯一のオリジナルの建造物とされる。

境内に入ると本堂があり、そこには鶴亀の燭台、獅子の香炉、花瓶の 3 つの青銅製祭具が納められている。これらは宗家の死去に対する弔意として、朝鮮国王から贈られたものである。朝鮮王朝は、江戸時代を通じて朝鮮と徳川幕府の間の外交を担当し、朝鮮との貿易を独占していた宗家と緊密な関係を保っていた。万松院はかつてこのような道具を数多く所有していたが、第二次世界大戦中に軍用として徴用され、溶かされてしまった。

本堂から 132 段の石段を登ると、宗家の霊廟がある。最上部の上御霊屋には、3 本の杉の巨木がそびえ立ち、領主の墓とその妻や成人した子供たちの墓がある。墓の大きさは対馬藩の隆盛期と富裕期によって異なる。朝鮮貿易で栄えた 17 世紀後半の対馬の繁栄を反映し、義成の墓とその後継者である義真（1639-1702）の墓が最も大きい。墓地の下層には側室や幼くして亡くなった子供など、他の一族の墓がある。